

自主シンポジウム 20

自閉症児における社会的認知の
発達支援の展望

—他者意図理解のアセスメントと支援—

企 画 者 長崎 勤（筑波大学人間総合科学研究科）
中村 晋（筑波大学附属大塚特別支援
学校）

司 会 者 中村 晋（筑波大学附属大塚特別支援
学校）

話題提供者 長崎 勤（筑波大学人間総合科学研究科）
大神 英裕（九州大学人間環境学府）
実藤和佳子（九州大学人間環境学府）
中村 晋（筑波大学附属大塚特別支援
学校）

指定討論者 大井 学（金沢大学）

近年の研究から、自閉症児では共同注意、他者意図理解、意図の共有、心の理論などの社会的認知（social cognition）に重篤な障害があることが示されている。本シンポジウムでは、社会的認知の「はじまり」といえる、他者意図理解と意図の共有のアセスメントと支援の方法に焦点を当て、自閉症児への社会的認知発達支援の可能性と方法論の課題について検討した。

大神・実藤氏からは、「意図理解の発達評価と“like me” 仮説に基づく発達支援」と題した話題提供がなされた。まず、大神氏から、大規模な乳幼児のコホート研究から、1 歳前後に定型発達過程と異なる自閉症児の共同注意や他者意図理解を中核とする社会的認知の特徴を見いだす知見が紹介された。これらの知見から自閉症ハイリスク児に対しては、最初は生活モデル型、その後は個別療育型の 2 段階で対応している。生活モデル型は自由遊びと集団遊びを中心とした場であるが、母親の育児不安は軽減され、多くの子どもたちに発達的变化がみられる。しかし、どのような要因が発達促進に有効なのかを示す実証データは乏しく、個別療育の効果も含め、今後の研究の展開が必要であることを強調された。次に実藤氏から、Meltzoff の“like me” 仮説（他者を自分のようにみなす）に基づき、母親が子どもの行動を模倣する模倣行動、何らかの行動によって反応する随伴的行動による観察と、自閉症児への介入を行った結果が示され、大人による子どもの行動の模倣が、意図理解を促進する可能性が指摘さ

れた。

長崎からは「社会的認知の発達と支援プログラム—意図共有と SCERTS プログラムをめぐって—」と題した話題提供がなされた。Tomasello et al. (2005) による「意図共有（joint intentionality）の発達過程を紹介し、今まで、抽象的・哲学的にとらえられていた「意図共有」の行動レベルでのアセスメントと支援可能性について指摘した。また、Prizant et al. (2006) の「SCERTS モデル」も共同注意と情動調整を強調しており、社会的認知発達のアセスメントと支援に貢献する可能性が高いことを指摘した。これらの研究知見を生かした、初期発達段階の自閉症児に対する「意図の共有」「情動の調整」に焦点を当てた包括的な支援について報告し、社会的認知発達の支援の可能性を述べた。

中村氏からは「スクリプトを用いた社会的認知発達の支援—協同行動の獲得に向けて—」と題した話題提供がなされた。知的障害児特別支援学校に在籍する ASD 児に対し、2 人の自閉症児による「マット運び活動」と自閉症児と教師による「怪獣へのエサやりゲーム」による「協同活動」（cooperative activity）の遂行を促す指導が紹介された。マット運びでは、一緒にマットを運ぼうとする「目標の共有」の前段階に、他児のマット運びの様子を見る「目標の理解」の段階があることを指摘し、協同活動（意図と注意の共有）のアセスメントと支援手続きの必要性を指摘した。

最後に指定討論の大井氏より、自閉症児に困難と考えられる社会的認知にチャレンジする意味と、今回紹介された、条件を統制した「実験的」な支援ではなく、日常生活での支援の可能性について質問がなされた。大神・実藤氏は、「生活モデル型」支援の可能性について、中村氏は、学校での、今まではあたりまえのようにしてきたがきめ細かくはできていなかった日常生活での社会的認知行動（2 人で掃除をする、2 人で手を繋いで歩く）を通して支援できる可能性が高いことを指摘した。最後に長崎は、個別課題だけで一日過ごすことはできなく、社会性の支援は必要であり、支援は日常生活のなかで十分可能だが、何に注目してアセスメントと支援を行ったらよいかを実証する基礎研究が今後一層必要になると述べ、シンポジウムを閉じた。同時刻、ドナ・ウィリアムズ氏の講演があったにもかかわらず、多数の方にお越しいただき、この分野への関心の高さを実感した。充実した議論ができたことを感謝します。